

音楽との出会い



神原雅之氏

一、母の薫陶

あれは私が小学校に入学して間もなくだったろうか？何分にも記憶がはつきりしないのだ。母から突然に「ピアノを習ってみない？」との誘いがあった。私はすぐに「習ってみる」と答えたが、その時に母は一つの条件を付けた。その条件とは、いったん習い事をはじめたら最後までやり通すこと、であった。幼い私は「わかった」と素直に返事をした。ピアノに限らず何でも同じだと思いが、物事を最後までやり通すことはそんなに楽なものではない。そのことに気づくのにそんなに時間はかからなかった。なぜ母は、私にピアノを習わせようとしたのだろうか。

小学校に入ると、当然の如く「読み」「書き」「そろばん」が始まる。それを機に、母のスパルタともいえる薫陶教育が始まった。また学習塾のない時代である。教科書の復習・予習を中心とした家庭学習が連日始まった。母は気むずかしく短気で負けず嫌いな人である。音読ができなかったり、計算に手間取ったりすると厳しく叱られた。その愛の鞭の甲

斐あつて、小学校での成績は程々に良かった。母も人一倍喜んでくれた。その瞬間は母も私も安堵のひと時であった。母は厳しさの反面、音楽はなかなか旨く教えられなかったようだ。かくして近所の小学校の先生宅に通うこととなった。両親はことさらに音楽が得意ではなかったが、事あるたびに歌い、音楽を愛していた。その所為か私の遅々と進まないピアノレッスンも好意的であった。

二、レッスンの始まり

今頃の早期教育の風潮を思うと決して早いとは言えないピアノレッスンが始まった。当初は楽しくレッスンに励むも、譜面が少し込み入ってくると旨く理解できない。先生からどんなに精魂込めて教えられても記憶に留まらない。ほとほと自分が嫌になつた。でもここで辞めるわけにはいかないのである。最初の母との約束を悔いる日々が続いた。レッスンの日は憂鬱だった。先生宅の玄関前まで行つて、黙つて帰宅したこともあった。不思議にもそれがバレても母は私をそんなに咎めなかった。とにかく続けることが第一義であった。このような不出来な生徒を持つ先生は大変である。先生はさまざま指導の工夫をして下さつた。譜面が読めずレッスンが進まない時には先生と一緒に連弾をした。なんだか自分が上手になつたかのような錯覚

を抱いた。また、事ある毎にレッスン仲間で合奏や歌を楽しんだ。こうしてレッスンを辞めることなく、細々と続けたのである。中学生になつた頃には何とか人並みには譜面が読めるようになり、ピアノも特技といえる位には成長していた。継続は力なり。母の薫陶の御蔭である。中学時代には吹奏楽の楽しさにも触れた。音楽担当の先生は「時間」に厳しい方であった。自作の歌唱曲を取り入れたユニークな授業を展開された。皆でその楽曲を歌い合奏した。これもまた楽しかった。高校に進学した頃、私は音楽教師になりたいと思うようになつていった。しかしである。当時、音大に進むためにはどのような準備が必要なのか全く知識がなかった。「コールユーブンゲン」「コンコーネ」「聴音」「初見試唱」初めて耳にする単語ばかりである。高校2年になり、新しいピアノの先生に教えを求めて、受験準備に取りかかった。幸運にも希望の音楽大学に合格することができた。まずは大きな壁を乗り越えた。しかし、これはやつとスタート台に立ったというだけである。この頃、洪々、父は私が家業を継ぐのを諦めたようだった。父の気持ちを察すると少々申し訳ない気がした。しかし、これは音楽の道を辞めることができないという気持ちを強めた。何が何でも音楽で身を立てなくては！。

三、リトミックとの出会い

音楽教師になりたいと思っていた私は、音楽大学でリトミックを専攻した。ここでリトミック教育の第一人者である板野平先生との出会いがあった。母や受験準備で出会った恩師の厳しさとは異なり、温厚でもの静かな先生であった。トツトツと語られる先生の言葉は重く深い。不勉強な私は、当時それが十分に理解できないうえに、次第にリトミックの魅力に取り憑かれていった。

リトミックは身体運動を取り入れた音楽教育である。例えば、ピアノ即興演奏を聴きながら、歩いたり止まったり、走ったりスキップしたり。これをはじめて体験した時の楽しさは忘れられない。まさに小学校の頃に体験したピアノの先生と連弾したときの喜びを想い出した。卒業後、幸運にも私は教職につき、多くの子どもや学生らとリトミックを楽しむ時間を過ごしてきた。この間、「リトミックってリズム体操?」「幼児のための教育?」などと尋ねられるが、それを的確に言い表せない。困った。最近ようやく私なりに、リトミックには二つの重要な意味があると考えられるようになった。一つは「音楽のうねりにのる」こと、もう一つは「コミュニケーションの空間」だということ。リトミックの体験が私たちの生活を活性化させてくれる所

以は、このあたりを集約される。

巷に渦巻く様々なタイプの音楽は言葉の訛りにも似た存在である。同様に、ひとり一人の動作の差異は身体言語としての訛りを含んでいる。リトミックは、この身体言語を、音楽化し、それを意識化することによって、音楽の本質に迫ろうとするとところに面白みがある。しかし、これを一言で語るのは至難の業だ。それゆえに最近「リトミックって何?」と尋ねられたら「音楽すること」と答えることにしている。

四、人との出会い

私と音楽の出会いを振り返ってみたとき、そこには偶然の出会いの連続であることに気づく。両親は選べないものの、恩師、仲間、先輩や後輩等々、多くの人との出会いは誠に不思議な縁である。音楽を学ぶことを通して、音楽そのものの奥深さに触れることも重要であるが、その価値は多くの人々との関わりによって肉づけられたところが大きい。周りの人々の動きは、自分自身の心の有



写真転載許諾：リトミック研究センター広島第一支局

り様に少なからず影響を受ける。喜びも悲しみも波紋となって人々の心の中を駆けめぐるのである。同じように、古今東西の様々な音楽は、人々の心の波紋を映し出す存在である。

小学校時代に味わった勘の悪い私は、音楽の表面しか見えていなかった。少しずつ、音の内側に含まれる心の裏に気づくまでは、かなりの時間を経験した。「石の上にも三年」と言われるように、何事も見えないものが見えるようになるには時間がかかる。いま振り返ると、母との約束は辛うじて果たしたように思うが、母の気持ちも遅ればせながら最近になってやっと見え始めてきた。

没頭できる何かを得た人は幸せである。私は決して音楽的才能に秀でてはいないが、母の厳しさの裏側にある「音楽を愛する」という素晴らしい宝物を与えてもらった。

プロフィール

神原雅之（かんげらまさゆき）

一九五二年、広島県生。現在、広島文教女子大学教授、広島大学（教育学部）非常勤講師など、専門は音楽教育学。著書に「リトミックコーナー」「子どもからの贈りもの」、訳書に「リズムインサイド」「音楽的成長と発達」ほか論文多数。子育て支援の講演などにも積極的に関わっている。